ヒューマンウェアインターンシップ報告書

インターンシップ体験記　（海外インターンシップの場合は英語で記入）

経緯（インターンシップ先探しから決定まで）

1. 候補探し（D1, 10-12 月）

インターンシップ先を探し始めたのは，博士後期課程 1 年（D1）の 10 月頃であった．D2 の夏から秋の参加を理想として，まずは一般公募を含め，HWIP から紹介されているインターンシップについても具体的に参加を想定しながら情報収集を始めた．

この時期はコロナ禍真っ只中で，インターンシップの中止やオンライン限定の参加など実施が難しい中であったが，私は現場・対面の体験を希望し，その可能性を探していた．

2. 候補 A（D1, 12 月-）

インターンシップ先探しと同時に指導教員に「企業でインターンシップがしたい」という旨の相談をしたところ，ある海外企業のインターンシップの具体的な候補の話を頂いた．先方様に近い別の先生を通じて，受け入れのお伺いを立てた（D2 の 3 月頃）．しかし，諸般の事情（コロナ禍関連の問題も含むと思われる）により，受け入れが難しいをいう返事を頂いた．

3. 候補 B（D2, 4-8 月）

候補 A の後に，研究室の先生に勧められたのが，ある有名な国内企業であった．自身の研究分野に非常に近く，近年急成長するこの企業でのインターンシップは，非常に魅力的であり，D2 の 5 月頃に一般公募から応募した．数回の面接や履歴書の送付などを実施し，最終的には口頭試問と，現場のエンジニアとの面談までに至った．具体的な開始時期を 10 月と設定し，会社の案内までいただいていたが，D2 の 8 月に選考から落選したとの旨のメールをいただいた．

私の力不足が主な原因であるが，受け入れ先は日本人以外のエンジニアも大勢いる現場であり，優秀な留学生の希望者も多く，限られた枠の中で競争に負けたことが要因であると推測している．面接の中で具体的な話が進んでいたため，他の企業の説明会や 1 day インターンシップ以外では，実際に長期の研究インターンシップを応募することが難しく，時期としては一部の興味深い応募先の候補を逃してしまった．

4. 候補 C（D2, 8 月-）※今回のインターンシップ先

候補Ｂの参加について指導教員には事前にその許可を頂いていたため，この選考落選の報告とインターンシップ先について相談をさせて頂いた．その際に，指導教員に新たに紹介していただいたのが今回のインターンシップ先の企業である．この企業については，のちに受け入れ担当者となったエンジニアの方が業界有数の国際学会で顕著な成果を発表しており，その時点である程度の認識があった．自身の希望する業界であり大変興味深く，指導教員を経由して受け入れをお願いした．これまでインターンシップ生の受け入れを実施していない企業であったが，一度の面接を頂いた後，幸いにも後日受け入れてくださる旨の連絡を頂いた．

準備期間中に学んだこと，遭遇した課題

インターンシップ開始前にミーティングを実施していただいており，おおよその活動方針とテーマは決まっていた．インターンシップ決定の経緯から，当時指導教員の威光を笠に着たような気分がしており，ここでは自身の力で短い期間の中で十分に成果が上げられるように，事前にテーマ周辺の分野について基礎的な知識の学習や，ソフトウェアのライブラリについての理解を進めた．活動内容の具体的な方針が未決定であったため，今回の結果に相当するような文献調査やスキルの習得には至らなかったが，インターンシップ開始当日を迎えてしまった．

インターンシップの目的

インターンシップに参加する上でまず次の二点の目的を自身の成長のために設定した．1）学位取得後にエンジニアとして働くことの適正を確認する．2）明確な顧客・利用者がいる場面で先端技術を実用化し実運用する一連のフローを体感する．また，3）大学で学んできた経験や知識を，従事先への貢献のために提供し，三か月という短い期間の中で重要な知見を残す．

ヒューマンウェアインターンシップ報告書

インターンシップ体験記　（続き）

成長したポイントと達成できなかった課題

従事期間中の大きな成長は，スピード感のある研究・開発・実装を体験したことが挙げられる．課題解決に重要な専門的な経験・知識を持たない状態から期間を開始し，特にインターンシップは定められた期間で成果を出す必要がある．しかしインターンシップ先のエンジニアの皆さんが納期の遵守は勿論，一人が複数の案件を抱え多忙にされる様子を間近にすると，（学生としての甘えも相まって）私の思考の遅さ，初動の悪さが際立ち，力不足を痛感した．そこで，初めは真似事のように開発や検証に努めつつ，教えを乞いながら地道に取り組んだ．次第に一定のスピード感で，一部は自分主体に動けるようになった．今後専門研究では，ここで得たスピード感やフットワークの軽さを活かし，これまで時間の制約上諦めざるを得なかった課題を克服したいと考えている．

一方で既定の勤務時間内で作業しその他をプライベート，と線引くことができず，学生としての普段の暮らしぶりと何ら変わらなかった点は反省すべきである．インターンシップ参加期間の後半が，コロナ禍事情の影響を受け，自宅（宿泊先）で作業が可能になった特別な事情が関係するが，「作業終わり」の区別がつかなくなり，かえって負担が重くしてしまった．近年の「新しい働き方」や「健康」を踏まえれば，些か時代にそぐわず，今後活動する上で一つの課題としたい．

コミュニケーションについて学んだ点や気づいた点

インターンシップ先では，業務中の貴重な時間をいただき，ほぼ毎日という頻度で話を聞いてもらう他，テーマを進めていく上でのアドバイスを頂戴した．普段の研究室においても頻繁に学生同士のコミュニケーションがある．ただ，指導教員とのコミュニケーションは限られた時間内でしていただけることがあっても，その間に些細な会話を挟むことは難しく，コロナ禍事情も相まって，十分ではなかった．しかし，それに気づくことはなく，独学で進めていくことが多かった（ただしそれが学びになった面もある）．しかしながら，今回のインターンシップを通じて議論の中で新しい発見や，失敗の検証ができたことで，改めてコミュニケーションの重要性を理解した．

研究室とは異なる業界で働いたことで得た体験

今回初めて企業内部にお邪魔して体験・見学を通じ，仕事に対する責任の重さについて学んだように思う．研究室においては，学生は目の前の学術的な発展に貢献できるように研究しその成果を発表する．仮に企業との共同研究であっても学生自身が先方の将来に責任を持つことは少ない．一方，企業では当然先方に利用者（取引先）がいて，それをどう協力して案件を解消するのか，を考える必要がある．さらに会社が今後発展するにはどうすればよいのか，など中長期的なプランが求められ，社員一人一人に重大な責任がある．

今回は実務に携わり責任を負った体験ではなかったが，在籍中の仕事風景の見学し，貴重なお話を頂く中で，個人の責任や，信用・信頼を築くことの重要性を知ることが出来たように思う．

週末の活動を含め，現地での日々の生活について

会社から一駅のところにあるマンスリーマンションを契約した（図 1）．場所は秋葉原電気街に近く，人通りが比較的多い地域である．JR 線，地下鉄線ともに徒歩 5 分で最寄り駅に行けることや，食料品店やドラッグストアなども徒歩で十分可能な位置にあることから生活する上での問題はなかった．

コロナウイルスの感染リスクから不要不急の外出を避けるべき世間的な事情もあり，週末は部屋の中で過ごす時間が多かったように思うが，家賃の補助を頂けたことで，十分に清潔で広い部屋を借りられたのは不幸中の幸いであった．

図 1 宿泊先の部屋の様子